



をのばしてつかみ、それをすぐに口にもって
いくような行動をみせるのですが、8ヵ月頃
から逡巡^{しゆんじゆん}がはじまります。手をのばしかけた
けど、「なんだ、これ？」とばかりに人形を
じっと見て手をひっこめる、2つが違うおも
ちゃであることに気づいて何度も見返りをし
てからそっと手をのばす…といった姿です。
「違い」や「変化」に敏感になってきた8ヵ
月児…それは、この時期の「ひとみしり」や
「8ヵ月不安」といわれる姿に通じるものが
あるようです。「違い」を感じ分けるからこ
そ不安にもなるのですが、同時にそれは、外
界をより深くとらえていこうとする姿でもあ

るのです。
2つの価値の間でゆれる
1965年に放映された『次元の子ども
たち』（東京12チャンネル制作）に出てくる
子どもたちも、さまざまな「ゆれ」をみせて
います。ちょうど「1歳半の発達の節」でが
んばっているきよしくんは、発達検査のはめ
板課題では、まだ上手に切り替えができません。
「きよしくんは右のきき手にもった丸い
板を、すぐ前の丸い穴にはめることはでき
る。穴の位置が反対になると、もうついてい
けない。きよしくんは、自分の体と心にびつ
たりとくっついていた行動をいろいろとくり
かえすことはできるのだが、まだ外のように
が変わったとき、その意味がくみとれない。す
べての正常な子どもも、1歳半までにこの段
階を通る。そのことを明らかにしたのは、正
常児ではなく、実はこのきよしくんたちであ
る。」という田中昌人氏の解説がナレーショ
ンで流れます。映像のなかのきよしくんは、
円板が入らないことを感じ取り、困ったよう
な照れたような表情で、耳に手をもっていき
ます。
きよしくんは、朝、洗面所に向かうシーン
では、指導者から手渡された洗面器をもって
洗面所に向かうのですが、そこで顔を洗うと
いう行動には結びつかず、手をヒラヒラさせ
ながら窓からの木漏れ日に心を奪われていき
ます。洗面器は廊下に置き去られたまま…。
確かに、外の世界に「自分の体と心をびった



成人期のなかまたちが 教えてくれること

10月号では、学校と卒業後のズレについて
述べました。「将来のため」と、学校だけが
努力しようとするような閉じたがんばり
は、結果的に生徒たちを追い込んでいくので
はないかと書きました。これは、本連載の6
月号でとりあげた、作業所通所を拒否したケ
ンゴさんの話にもつながるものです。一方、
ふとんのなかのケンゴさんの姿は、発達の
みれば、「今の自分」と「未来の自分」との
間でゆれ動く姿ということもできるでしょ
う。今回は、こうした「ゆれ」のもつ意味を
もう少し考えてみたいと思います。

2つのモノの間でゆれる

赤ちゃんの発達をみると、たくさん
不思議に出会います。8ヵ月頃の赤ちゃんが
みせる「ゆれ」もその一つ。6ヵ月頃にな
ると、目の前に出されたおもちゃにスムーズに
手をのばし、さらにそれを口にもっていつた
り、右手から左手、左手から右手へともちか
えて遊ぶことも増えていきます。「乳児期後
半に入ったんだな」と実感する場面です。

K式発達検査などの標準化された検査では
「モノをもつか」「もったモノをどう扱うか」
に主眼が置かれていたため、1種類のモノ
（積木、鐘など）、もしくはモノと器（コッ
プ、ビンなど）を提示するという課題が多い
のですが、あえて2種類のモノ、たとえば積
木とイチゴ（おもちゃですが…）、積木と人
形などを対提示してみます。すると、7ヵ月
頃までは、とにかく先に視野に入った方

第8回 「ゆれる」ことの値打ち



滋賀大学 白石恵理子

しらいし えりこ / 1960年、福井県生まれ。大津市発
達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。おもな
著書に『一人ひとりが人生の主人公』『しなやかにしたた
かに仲間と社会に向き合って』『保育・教育のための発達
診断』（共著）（いずれも全障研出版部）『人間発達研究の
創出と展開—田中昌人・田中杉恵の仕事を通して歴史をつ
なぐ—』（共著）群青社など多数。